



TITLE:

保険機構に於ける資本

AUTHOR(S):

西藤, 雅夫

CITATION:

西藤, 雅夫. 保険機構に於ける資本. 経済論叢 1941, 52(3): 375-389

ISSUE DATE:

1941-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/131510>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷二十五第

月三年六十和昭

論 叢

經費支出の季節的調整……………經濟學博士 沙見三郎

戰爭經濟に關する一主張……………經濟學博士 松岡孝兒

中世イギリスの海運政策……………經濟學士 佐波宣平

景氣政策の問題とシェンビイトホフの景氣理論……………經濟學士 青山秀夫

國際カルテルの諸問題……………經濟學士 靜田均

研 究

ハルムス世界經濟學とその周圍……………經濟學士 松井清

保險機構に於ける資本……………經濟學士 西藤雅夫

說 苑

コッホ・戰時租稅政策……………經濟學士 柏井象雄

附 錄

彙 報

外國雜誌論題

保險機構に於ける資本

西 藤 雅 夫

—
保險は、本來、貨幣の交流の機構として、これを理解することが出来る。云ふまでもなく、保險事業は、いはゆる保險關係によりて成立つ。この關係は、多數の加入者が、保險企業に對して貨幣たる保險料を拂込み、保險企業は、これが集積のうちから、保險事件の發生を條件として、加入者に對して貨幣たる保險金を支拂ふ、と云ふ關係である。

保險關係に於ける、斯くの如き貨幣の授受は、これを交換とは見難い。蓋し、保險料を拂込みたる加入者のすべてに對して、保險事件が發生し、從ひて保險金が支拂はれる、とは限らないからである。保險は正しく、交換にあらざる、貨幣の交流の機構である。然し乍ら、こゝに於て交流するものは單純なる貨幣に止るか。それは、資本たる性格を持たざるものであるか。いま、若し、貨幣たる保險料と保險金が、何等かの觀點から資本たり得るならば、保險は、やがて、資金の交流の機構となる譯である。

扨て、貨幣は價値の具現たるものであるが、それが増殖の過程にあるとき、換言すれば、利潤の追求の意圖のもとに置かれるとき、資本たる資格を獲得する。而かも、それが貨幣たるの點に於て、特に、資金 (Capital) と名付けられるのである。資金たる貨幣と、然らざる貨幣とは、その貨幣たる實體に於ては、別段に相異なるもの

ではない。然らば、保險にありては、貨幣としての保險料と保險金は、如何にして資金となり得るか。

一般に保險料と名付けられるものは、純保險料と附加保險料とに分たれる。前者は、その集積が、結局保險金として支拂ひつくさるべきものであり、後者は、この勞務に必要な經費の分擔である。それ故に、保險に於ては、貨幣の交流は、純保險料より保險金に至ると、附加保險料より保險の勞務に至るとの、二つの系統のもとにこれを考察することが出来る。

この二つの系統は、觀念的には別個のものであるが、現實には、然く切り離し得る譯ではない。前者は保險の本質を形づくるものであり、後者はこれを現實に齎らすものである。換言すれば、保險の本質としての、純保險料より保險金に至る貨幣の交流が、事業として行はれるためには、附加保險料より保險の勞務に至る貨幣の交流を、媒介とせざるを得ない。それ故に、保險に於て交流する貨幣が、資金となるがためには、右の二つの系統に於て、それ々々、利潤の追求がなければならぬのである。

二

まづ、第一の系統に就て考察しやう。こゝにありては、多數の加入者によりて拂込まれる純保險料は、保險企業によりて集積せられ、責任準備金となる。それは、或る期間の經過の後、保險事件の發生を條件として、遅かれ早かれ、保險金として支拂ひつくされる。この際、保險料と保險金とは、全體として相等しき筈である。こゝにありては、貨幣が、たゞ、保險料より責任準備金、責任準備金より保險金と、その姿をかへることによりて、交流することとなる。

保險の本質は、實は、このことによりて可能である。然し乍ら、實際には、責任準備金は、保險金支拂ひまで

の期間、保險企業によりて運用せられる。この運用は、ある大いさの利潤を生むのであるが、それは、多かれ少かれ、廻りて、保險料のうちに織込まれ、保險料とこの利潤とが、合體して保險金に等しからしめられる。このことが、生命保險に於て最も顯著なるは、周知のところである。

責任準備金の運用によりて齎される利潤に就ては、その一部分が、保險企業の利益金となり、更にそのうちのあるものは、企業の内部に留保せられて、責任準備金と相合して、運用せられることとなるであらう。ところで、保險にありては、責任準備金の運用によりて生ずる利潤は、本來、保險に於ける企業としての利潤ではない。實際に於ける企業としての利潤は、責任準備金の運用に於て、その豫定利潤を偶々超過するところの、利潤成績を擧げ得たる場合の、その超過分と、經費の分擔としての附加保險料とに、求められるのである。

然し乍ら、とも角、責任準備金の運用に着目する限り、利潤の追求は存在する。保險料と保險金とは、正しく斯る過程に於て交流するのである。ここに於て、それらは、資金たる性格を持つ。かくて、保險にありては、資金は、保險料と保險金として交流するのであるが、これを或る時點に於て、企業の財産として考察するならば、それが、責任準備金と名付けられるものに外ならない。それ故に、保險の機構は、責任準備金の生成消滅の機構であると云ひ得られるのである。

斯くの如くにして、責任準備金の運用を取り入れるならば、保險料は、その直前のすがたとして、保險金は、その直後のすがたとして、それ／＼資金となる。このことは、飽くまで、保險企業の立場からの考察である。それらが、加入者の立場から、資金となるか否かは、問ふところではない。いま、我々は、斯る資金の交流を、資本の循環として把握すれば、これを次の如くに、現はすことが出来やう。

$$G \dots R \dots R(R+i) \dots G'$$

右に於て、 G, R, R, i, G' は、それ々々、純保險料、運用直前の責任準備金、運用直後の責任準備金、運用の利潤ならびに保險金を示す。これによりて知られるが如く、保險料の拂込みは、資本の形成を意味し、保險金の支拂ひは、その分解を意味する。このことが右に述べたところの、責任準備金の生成と消滅である。たゞ、この場合、資本の分解としての保險金の支拂ひは、それが支出たるの點に着目すれば、特に費用 (Kosten) となる。斯くの如き資金の交流を、現實に齎らすところの勞務は、正に保險企業の提供するところである。いま、この勞務の提供は、生産と考へられるべきものではない。

一般に、生産は、一定の財の結合によりて、更に大なる效用を持つところの、財の獲得である。この財が、有形たるか無形たるかは、元より問ふところではない。ところで、この效用は、貨幣經濟にありては、價格を以てこれを測るの外はない。扱て、企業にありては生産は、利潤を擧ぐべき技術過程である。こゝにありては、收益が費用よりも大なるが如くに、財が結合せしめられる。企業は、云はゞ收利性 (Rentabilität) を追求することによりて、生産性 (Produktivität) を實現するのである。これを逆に、生産性の實現によりて、收利性を追求する、と云つても差支へはない。

然るに、保險にありては、財と考へられるものは、本來取扱はれないのである。元より保險金の支拂ひを、保險料に對して賣られるところの、財と見ることは、必ずしも不可能ではない。然し乍ら、こゝに注意すべきは、この財は、實は、その對價たる保險料によりて構成せられたものである。斯くして、保險にありて、財と見られるもの存在し難しとすれば、この企業に取りては、生産はあり得ないこととなる。

ところが、責任準備金の運用は、利潤を生む。いま、この點のみを取り上ぐるならば、效用の増大が認められるから、これが一應は生産と見られない譯ではない。然し乍ら、これはさきに述べたるが如く、保険に取りては第一義的ではなく、従ひて本質的なことがらではない。蓋し、加入者は、必ずしも、このことのみを目的として、保険關係に入り来るものではないからである。

そも、生産は、企業に取りては、その據りて立つところの技術的過程である。これを他面より見れば、人々が企業の提供する財を、それだけの價格を以て買入れることを意味する。この場合、企業の目的とするところは、この價格と、生産に必要な費用との差額として、利潤を擧ぐるにある。ところで、責任準備金は、云ふまでもなく、保険料を對價として賣られるものではない。保険にありては、如何なる意味に於ても、生産ありとは見難いのである。

保険が、資金の交流の機構たる所以は、責任準備金の運用によりて、利潤が擧げられるの點にある。然し乍ら、この利潤は、實は、企業の利潤を形づくるものではない。それ故に、保険の勞務は、本來生産性の實現でもなく、また收利性の追求でもなき、資金の交流の操作 (Verfahren) であると、見ざるを得ないのである。

三

次に、第二の系統に就て考察しやう。扨て、斯くの如き操作が企業として行はれる限り、それは云ふまでもなく、費用の支辨のもとに於てである。これに充當せられるものとして、一方に於て附加保険料があり、他方に於て自己資本 (株式組織にありては株金、相互組織にありては基金) がある。保険企業が、斯る自己資本の外に、社債や借入金などの他人資本を持つことは、法制的には妨ぐるところではないけれども、この企業は、本來、貨幣の授受

を業務とするのであるから、このことは社會的な信認に影響する。それ故に、現實には、企業の資本は、保險料を除きては、自己資本に限られることとなる。この點に於ては、保險事業は銀行事業と類似する。

扱て、附加保險料と自己資本とは、相合して、さまざまの形を取り、或ひは建物什器などの物的施設となり、或ひは勞働となる。然し乍ら、大體に於て、自己資本は固定的費用に、附加保險料は流動的費用に、それぞれ振向けられる。ところで、このことが企業の利潤を目的とすること、云ふまでもない。保險企業は、それ自體は收利性の追求にあらざるところの勞務の提供によりて、收利性を追求するのである。

こゝに於て、附加保險料と自己資本とは、單なる貨幣たるに止らず、資金たる性格を持つ。換言すれば、附加保險料の拂込みは、企業に取りては、資本の形成に外ならないが、自己資本の調達も、また同様である。たゞ後者に就ては、經營の進展に伴ひて、利潤よりの留保部分が、これに附け加へられる。ところで、これらの資本は、やがて、分解して、保險の勞務となる。それが即ち、第一の系統たる本質を、現實に齎らすことを意味するのである。斯くして、第二の系統にありては、資本の循環は、次の如くに現はされるであらう。

$$G_1 > \dots G_n \rightarrow L < M$$

$$G_1 \dots G_n$$

右に於て、 G_1, G_2, \dots, L, M, A はそれぞれ、自己資本、附加保險料、企業利潤、保險の勞務、物的施設ならびに勞働を示す。こゝに於て注意すべきは、附加保險料が資本として形成せられる過程 ($G_1 \dots G_n$) には、既に、企業の利潤が含まれてゐることである。

およそ、企業の利潤は、収益と費用との差額として現はれる。費用は、企業の提供する給付のうちに、融け入

るのであるが、その對價としての収益のうちに、企業の利潤が存在する筈である。この際、収益と費用とが時間的に前後することは、敢て問題ではない。これを保險に就て見れば、附加保險料は正しく収益であるが、而かも、それは、費用たる保險の勞務に先立ちて現はれることとなる。

保險は、右の如くにして資金の交流の機構として、これを理解することが出来る。換言すれば、それは、資本の形成とその分解の機構である。この機構に於ては、資本の循環は、二つの系統のもとに、而かも不可分のものとして考へられるのである。

$$\begin{cases} G \cdots R \cdots R' \cdots G' \\ G_1 > \cdots G_n \cdots L < M \\ A \end{cases}$$

ところで、この二つの系統に於ける資本の交流は、無條件に資本の循環と見られるであらうか。次には、これに就て問題としやう。

四

扱て、資本は利潤を生むところの價值である。この利潤は、一般に經營と名付けられるところの、技術的過程を媒介として追求せられる。企業は、その個有の技術的過程に、價值を取り入れることによりて、利潤を擧げ、資本は斯るものとして、企業の内部に於て循環するのである。ところで、この技術過程は、或ひは生産と呼ばれるものたることあり、或ひは商業と名付けられるものたることあり、或ひは金融と稱せられるものたることある。それらに於ける資本の循環は、それぞれ次の如くに現はされ得るであらう。

$$G - W < \frac{P_m}{A} \cdots W' - G'$$

保險機構に於ける資本

G—W—G'

G—O—G'

これによりて知られる如く、資本の循環に於ける始點と終點とは、貨幣經濟の組織のもとにありては、常に貨幣の形で存在する。資本の循環は、リーガー (W. Reeger) の云ふが如く、その技術的過程の如何に拘らず、貨幣より貨幣への再轉化に、その共通性が認められるのである。

資本の循環を、斯くの如き方式によりて考察するは、資本を自己運動するものと見たる結果である。この運動を現實に可能ならしむるは、云ふまでもなく企業のお作である。そこで斯る點より見るならば、資本の循環の始點に於て、貨幣の現はれることは、資本の調達を意味し、それがさまざまに姿を代ふることは、資本の投下に外ならない。これに對して、終點に於て貨幣の現はれることは、資本の回收である。それ故に、資本の循環は、資本の調達ならびに投下とその回收の、一聯の結び付きとして理解せられるのである。

このことを、更に他の面より見るならば、それは費用の支辨と收益の實現との、一聯の結び付きである。企業はその技術的過程の遂行のために、その資本を費用の支辨に振當て、これを收益の實現によりて償ふのである。これを右の方式に就て見れば、資本の調達ならびに投下は、費用の支辨であり、資本の回收は、收益の實現に外ならない。

それ故に、一般に資本の循環にありては、その始點に現はれるものが同時に終點に現はれるものであると云ふが如きは、それ自體として、あり得べからざることである。即ち例へば資本の調達ならびに投下が、そのまゝ收益の實現とはなり得ない。然るに恰もこのことが保險に見られるのである。斯る意味に於て、保險に於ける資本

の循環は、これを一般の概念では律し得ざる、特殊のものと考へるか、むしろ進みて、資本の循環と見ざる事が適當であらう。

まづ、第一の系統にありては、その始點に於て貨幣の現はれることは、實は収益の實現である。蓋し、企業に取りて收入たるものは、これを措いては存在し得ないからである。これに對して、終點に於て貨幣の現はれることは、費用の支辨を意味する。蓋し支出たるものは、これの外にはあり得ないからである。保險にありては、資本の循環は、一般の場合と相異りて、まづ収益の實現があり、その後、費用の支辨がある。

然し乍ら、収益たるの意義は、必ずしも、それが收入たるの點にあるのではない。それは本來、それと費用との差額としての企業利潤を生むの點にある。ところが、保險にありては、くり返し述ぶるが如く、このことがない。それ故に、第一の系統に就ては、始點に於ける保險料たる貨幣は、これを収益と見ず、これに對應して、終點に於ける保險金たる貨幣は、これを費用と考へることが正しいであらう。それはむしろ、單なる收入と支出とに過ぎないのである。

ところで、斯る意味に於ける収益は、資本の調達ならびに投下である。純保險料は、企業に於ては、資本として受取られる。これが即ち調達である。この資本はやがて、責任準備金に構成せられる。即ち投下である。蓋し純保險料は、責任準備金の運用に着目する限り、利潤を生む價值であるからである。然し乍ら、こゝに投下と云ふも、それは單に資本の形態の變化を意味し、それが交換によりたる結果ではない。この點に於ては資本の投下は、本來の意味のものではあり得ない。たゞ、責任準備金の運用として、さまざまの財と交換せられることは、云ふまでもなく、資本の投下であるが、それは既に、保險料そのものに就ての考察ではない。

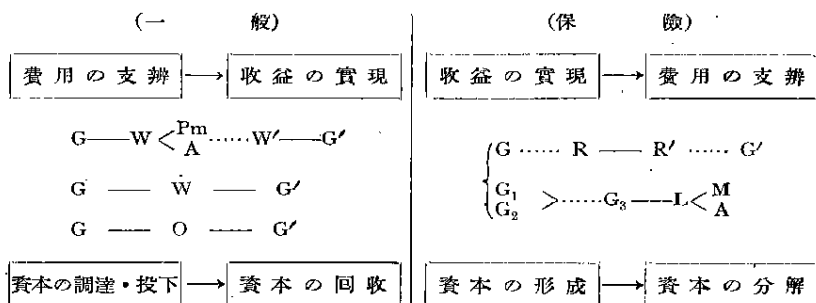
第二の系統に就ても、始點に貨幣の現はれることは收益の實現であり、終點に勞務の現はれることは費用の支辨を意味する。この點に於ては、第一の系統と相異するところがない。然し乍ら、この場合にありては、收益は單に收入たるに止らず、本來の意味に於て然るのである。蓋し、そのうちに、企業の利潤が含まれるからである。この收益の實現が、他面に於て資本の調達ならびに投下たること、云ふまでもない。而かも、資本の投下は、それが勞務への移り行きに於て交換によるの點から、本來の意味に於てこれを考へることが出來やう。

五

右に述べ來りたるところによりて、我々は保險に於ける資本の循環は、いづれの系統にありても、一般のそれと相異りて、收益の實現が、同時に資本の調達ならびに投下であると云ふ、頗る奇異なる性質を知り得たのである。およそ資本の調達ならびに投下は、その回收に對立する概念である。この兩者が、一聯の關係に結び付くことが資本の循環に外ならない。

ところで、保險にありては、この結び付きがない。保險料(純保險料ならびに附加保險料)は、いづれの系統に於ても、資本の調達ならびに投下として、始點に現はれる。然るに、終點にありては、資本は、第一の系統にありては保險金、第二の系統にありては保險の勞務の形を取る。これらが資本の回收にあらざること、云ふまでもない。蓋しいづれも企業に取りては支出たるからである。

いま、資本の回收が、收入たるの點にのみ着目すれば、保險料は、いづれの系統にありてもこれに該當する。斯る結果として、資本の調達ならびに投下たるものが、同時に資本の回收たるの矛盾を生ぜざるを得ない。斯くして保險にありては、資本の循環は、これを資本の調達ならびに投下とその回收との、一聯の結び付きと見るを



得ず、それは、資本の形成とその分解との一聯の結び付きと、考ふるの外なきこととなる。

いま、保險に於ける資本の循環を、さきに述べたるが如き意味に於て、収益の實現と費用の支辨との結び付きと見るとすれば、前者は資本の形成であり、後者は資本の分解である。このことは、一般の資本の循環が、費用の支辨と収益の實現、資本の調達ならびに投下とその回收の、それぞれの結び付きとして理解せられること、正しく對應するのである。そこで、これを上の如くに示すことが出来やう。

六

右に述べ來りたるところによりて、私は、保險に於ける資本の循環の特性を明らかにし、これを一般の場合と比較したのである。保險の本質の斯くの如き把握に就ては、寡聞にして、未だこれを見ない。たゞ一部の學者に於て、これに觸れたるものがあるけれども（高田保馬、經濟學新譚、第一卷、第四章、第二節）、それは私の見るところでは、必ずしも、ことの真相を捉へたるものではない。こゝにはこれを吟味することによりて、私の考察を明かならしめたい。

この見解によれば、まづ一定の資本によりて、利潤を生む手段が買入れられ、それが企業の内部に於て、生産にあらざる方法で、財として結合せしめられ、これが賣られると云ふのである。即ち「その資本によりて一方、建物設備と勤勞とを、他

方、保險金支拂準備金とを留意し、これらの結合によりて保險金の支拂と云ふ財を賣る。その對價として受取る保險料の總額が中に利潤を含む」こととなる。これが、

G—M—M—G

なる方式によりて現はされるのである。

これによりて知られる如く、資本の循環の始點に現はれる貨幣は、云ふまでもなく自己資本である。これに對して、終點に現はれる貨幣は保險料に外ならない。即ち、保險金の支拂ひと云ふ財が、自己資本によりて獲得せられ、それが保險料と交換せられるのである。それ故に保險にありては、資本の循環は、一般の場合に比して、財の獲得の技術過程に於て異なるの外は、別段の差異がある譯ではない。

扱て、保險金を、その支拂ひの勞務に着目して財と見るとしても、それは自己資本によりて獲得せられたものではない。くり返し述ぶるが如く、それは、純保險料によりて賄はれる。換言すれば、保險金は、保險料の體化 (Verkörperung) たるものに外ならない。保險の本質は、斯くの如き機構に、これを求めることが出来るのである。然し乍ら、この本質が、事業として現實に齎らされるに就ては、企業に於ける、保險の勞務と名付けられるところの、操作を媒介とする。これがための經費が、附加保險料と自己資本とによりて、賄はれるのである。

それ故に自己資本の體化たるものは、保險の勞務の外にはこれを求めることが出来ない。およそ、財の提供は具體的には、それ丈けとして一つのものであるけれども、觀念的には、財それ自體と、その提供の勞務とに分ちて、これを考ふること不可能ではない。保險にありては、この兩者の體化の源泉は、それぞれ別個のものである。即ち前者に就ては純保險料に、後者に就ては附加保險料ならびに自己資本に、これを求めることが出来る。

斯くの如くにして、保険に於ける資本の循環は、二つの系統のもとに、而かもそれぞれ不可分のものとして、これを考察し得るのであり、これらを一つの系統に纏めることは、却て理解を困難ならしむるのみである。

いま、假りにこの點を許して、一つの系統のもとに理解するとしても、右の見解には根本的な誤謬がある。そもそも、資本の循環にありて、その始點に現はれるところは、一般に、一方に於ては費用の支辨、他方に於ては資本の調達ならびに投下であり、これに對して終點に現はれるところは、一方に於ては収益の實現、他方に於ては資本の回收である。それ故に右の見解によれば、自己資本は費用として支辨せられ、若くは資本として調達投下せられるのであるが、それが、後に保険料の形を取りて、収益の實現として、若しくは、資本の回收として現はれることになる。

保険料の受取りが、収益の實現たることは、疑ひなきところであるけれども、それは、自己資本が費用として支辨せられたる結果ではない。費用は本來、収益のうちに融入する。詳言すれば、収益は、費用の體化したるものゝ提供によりて、その對價として實現せられるのである。いま保険料を、保険金の支拂ひと云ふ財の對價と見るとしても、この財は、決して、自己資本の體化たるものではなく、むしろ逆に、その對價たるものの、保険料の體化である。

このことは、根本的には保険料を以て、保険金支拂ひの對價と考ふるを得ざることを意味する。それ故に、保険料を収益と見るとしても、それは極めて特殊の意味に於てであり、それが收入たるの故に因る。ところで、保険にありては、資本の循環は、自己資本とともに、保険料の受取りに始まるのであるから、それは、一般の場合と相異りて、収益の實現より費用の支辨への移行行き、と考へられざるを得ない。

資本の調達ならびに投下と、その回収に就ても、同様の考察が可能である。いま、保険料の受取りを、資本の回収と見るとしても、それが自己資本の調達ならびに投下と、一聯の結び付きを持たざること、既に明かである。保險金の支拂ひと云ふ財が、保險料に對して提供せられ、これを資本の回収と見ることが出來ても、それは、決して、自己資本の體化たるものとして、その調達ならびに投下の結果としてのみ、獲得せられた譯ではない。むしろ逆に、その大部分は、保險料の體化たるものとして、その調達ならびに投下の結果である。

かくの如くにして、右の見解に基くならば、保險料の受取りは資本の回収であるが、それがやがて資本の調達ならびに投下と考へざるを得ない、と云ふ矛盾を生ずるのである。それ故に、保險にありては資本の循環はさきに述べたるが如く、これを資本の形成とその分解との、一聯の結び付きとして、理解せざるを得ないであらう。

七

扱て、資本の循環を、費用の支辨と収益の實現、または、資本の調達ならびに投下とその回収の結び付きとして考察することは、企業の技術過程を、商品性の實現と見ることの意味する。換言すれば、利潤の追求と云ふ企業の意圖に着目するならば、それは資本の循環であるが、その技術過程の遂行と云ふ、企業の実操作に着目するならば、それは商品性の實現に外ならない。

一體、經濟は頗る複雑なる生活現象である。このうちにありて保險は、リットル (L. T. Little) の言を借りるならば、經濟の合成產物である。これを商品性の實現としてのみ理解することに就ては、根本的に疑なきを得ない。およそ商品は、貨幣と交換せられる財である。これが現實に、有形たると無形たるとは問ふところではないこと、さきに述べたるが如くである。貨幣そのものも貨幣と交換せられる限り、商品となり得るのである。然るに最初に述べたるが如く、保險にありては、交換は本來存在し得ない。若しこれありとすれば、それは貨幣たる保

險金そのものであるか、若しくは保険金請求權、保證、安全感などの無形の財である筈である。

いま、この財を保険金に求め、且つそれが貨幣たるの點に着目するならば、それは商品たるともに、また保険料の對價でもあり得る。このことは、所得を商品とし、資本をその價格とする、ナイト (E. H. Knight) の所論に思ひを致すならば、首肯せられるであらう。保険金のみを商品とするは、單なる恣意に外ならない。

保險の商品性を、保險金請求權や、保證や、安全感などに求めるならば、右の缺點からは、一應は免れ得る。然し乍ら加入者は、本來これを目的として保險關係に入る譯ではない。彼の目的ところは經濟生活の確保にある。彼は保険料を拂込み、保險事件の發生を條件として、保險金を受取ると云ふ保險關係によりて、この目的を達成する。たゞこの關係を、彼と保險企業との間の法律關係として見る場合に、保險金請求權や保證など、して現はれ、またこれを、彼の心理に立ち入りて考察すれば、安全感が成立するのである。それ故に、これらを商品とする見解は、經濟的考察と法律的若しくは心理的考察とを混同したるものと云ふべきである。

いま、理論を經濟學的に展開する限り、保險は、くり返し述べたるが如くに、資金の交流の機構とならざるを得ない。この場合に於ける技術過程は、云はゞ全く特殊のものであり、それは資本の形成とその分解の、一聯の結び付きである。斯る意味に於て、保險は、本來金融事業となるのである。こゝに於ては、敢て商品性の實現を問題とするの要はない。これに就てはかつて論じたるところである。(法と經濟、一〇卷五號、一二卷四號)

保險の本質の斯る考察に就ては、私は實のところ確固たる結論に到達してゐる譯ではない。右に述べたところは、私の今日抱いてゐる問題に對する覺悟としてであり、また今後の理解のための道しるべとしてである。これに對して叱正を得るならばことに幸福である。